野木村　政三

エジソンの本の蓄音機

講談社少年文庫・エジソン（崎川範行著）に、[106 から 114 ページまで] 蓄音機のことが書いてあります。一緒に読んでみましょう。

タイトル・蓄音機第一号

エジソンの数えきれない発明のなかでも、世界を一番びっくりさせ、エジソン自身も一番満足した発明が蓄音機です

エジソンが幼かった頃、家の壁には、鳩時計がかかっていました。時間がくると、鳩が顔をだして、ポッポッポッと鳴きます。それを見るたびに「時計がものを言ったら面白いだろうな」と考えたのです。

また、姉が可愛がっていた人形は、抱きおこすと「ママー」といいましたが、もっとお喋りしないかなと思いました。

そのような幼い日の夢が、いつかエジソンを蓄音機の発明へと、導いたのでしょう。

この蓄音機の発明こそ「人々を喜ばせる」ということを心から願っていたエジソンにとって、本当に満足できる仕事だったに違いありません。エジソンは、人が喜ぶのを見るのが、なによりも嬉しかったのです。だから、エジソンの発明の中には、大砲だとか、爆弾だとか、毒ガスだとかいった恐ろしいものは一つもありません。

また、蓄音機を発明して、それが本当に誇らしく思えたのは、他の発明の多くが、人の失敗からヒントを得たものだったのに、蓄音機だけは、全くエジソンの独特の考えから生まれたものだったのです。

さて、ある日、エジソンは、遊び半分に玩具をこしらえてみました。
それは、一つのラッパで、それに口をあてて、
「メリー　ハッダ　ア　リットル　ラム・・・・・」
と、童謡を歌うのです。すると、机の上に置いた、気おり人形が、のこぎりで木を切り出すのです。　　それはこんな仕掛けになっていたのです。

歌声で、ラッパに取り付けられた振動板が震えると、それについた梃（てこ）が揺れて、歯車をおし送ります。歯車には、紐のかかった滑車がついていて、その紐が人形を動かすのです。

エジソンは、仕事に疲れると、歌をうたってはその人形を動かして、楽しみました。ところが、そのうちに、
「声が、薄板を振動させる力って、ずいぶん強いものだなあ。」
と思ったのです。すると、面白い考えが浮かんできました。

この声の振動で、針の先を動かし、それで回転円盤に波形をきざんだら、それは声の波形になるだろう。そうだ！それなら逆に、その波形で針の先を動かして、それで薄板を振動させたら、声が出るかもしれないぞ。」

さあ、こうなると、居ても立ってもいられません。すぐに実験にとりかかりました。円盤は難しいので、回転する円筒にし、円筒の面に螺旋状の溝をきりました。そして、その溝の中に錫箔を入れました。
これを手で回しながら、ラッパの振動板についた針の先を、この溝に入れてすべらせる、声が波形に刻まれます。そこでこんどは、円筒をまわして、溝の中を針すべらせると、ラッパから音がでるだろう、と考えたのです。

寝ずに考えたすえ、漸く設計図ができると、エジソンは細かい機械を作ることなら名人だという、クルージという男をよんで、それを渡しました。
「大急ぎだよ。とくべつ大事なものだからね。」
「え、これですか？いったい、何に使うものですか？」

それがいったい何の機械だか、クルージには、見当もつきません。わけが分らないままに、設計図とおりに作りあげて、エジソンの処へ持ってきました。

「うん、良く出来た。それじゃ、すぐ所員全部を集めてくれ。重大発表を行う」
エジソンが、まるで大統領のようなことをいいだしたので、皆は何事かと集まって来ました。

見ると、奇妙な円筒に、ラッパのついた機械を前にして、エジソンがしかつめらしい顔をしています。そして重々しい調子で
「さて、諸君。この機械がこれから歌をうたう。」と、言い出したら、皆はにやにやと笑い出しました。マッケンジーなどは、
「わっはっはっ・・・・・。」と声をあげて笑いだす始末です。
「作っているあいだ、ちっとも、歌いませんでしたがねえ・・・・。」
とクルージはいかにも、不思議そうです。
エジソンは、そんな皆にかまわず、ハンドルを回しながら、いつもの

「メリーさんの子ひつじ」という童謡を歌いはじめました。
「メリー　ハッダ　ア　リットル　ラム　リットル　ラム・・・」
　その歌が、あんまりとっぴょうしもないので、皆は、笑いを堪えるのに苦しみました。けれどもエジソンは、大真面目です。すまして歌い終わると、円筒の上の針を置きかえ、黙ってハンドルを回し始め廻しました。とたんに
　「あっ！」
　皆の顔が、こわばりました。ラッパから、今、エジソンが歌った
　「メリーさんの子ひつじ」
が聞こえてきたからです。クルージはぶるぶる震えながら
　「マイン　ゴッド　イン　ヒンメル・・・・」ドイツ語で「天にいます、我が神よ。」という意味です。故郷のドイツ語が飛びだしたのです。

　皆は、この機械を取り囲んで、歌ったり、楽器をならしたりして、いろいろな音をふきこみ、一晩中だれも寝ようとしませんでした。

エジソン自身、この時の事をこう言っています。
「考えたものが、そのとうりに出来上がると、いつでも、薄気味悪いものだ。だが、あの蓄音機が鳴り出したときは、背筋が寒くなるような気がした。」

　あくる朝、エジソンは、ニューヨークの科学雑誌「サイエンティフィック＝アメリカン」編集長ピーチの部屋をおとずれました。
「朝はやくから、どうしたのですか？」
「きみにみせたいものがあってね。びっくりしちゃいけないぜ。」

エジソンは、包みをほどいて、蓄音機第一号をとりだしました。そして昨日やったとおり、「めりー　ハッダ・・・・。」をやってみせました。
　さあ、たいへんです。編集長のビーチ氏は、自分の部屋の床が、ぬけはしないかとはらはらしました。たちまちおしあいへしあいの騒ぎになったのです。

　それからまもなく、さらに大きい蓄音機がつくられ、誰にでも見せますという広告がだされましたから、人々は、どっと、メロンパークにおしよせました。そのため、ペンシルベニア鉄道は、毎日、特別列車をしたてなければなりませんでした。ときの大統領ヘイズも、この話を聞いて、エジソンをホワイトハウスに招きました。「114ページ終わり」